

## 対照言語学の理論的基礎づけ ——その確立に寄与した三学説論を通して

和田 辨

〔本稿は、1977年9月の西日本言語学会講演の要録で、広大総合科学部紀要「地域文化研究」2号の同様の論文と半ば重複する補完的姉妹篇をなす。又本稿は、かねての持説の公表であると同時に、B. SpolskyのCL書評(Language, 49, 3, 1973), 及び言語学大会1976のCL論議中に出た懐疑論への批判の表明でもある。なお本稿は、方法論的Brennpunktとして、帰納・分類と演繹・生成の限界克服による二者対立超克の理論と実践をふくむ。CL = 対照言語学, CG = 同文法, CS = 同研究, CA = 同分析〕

### I Di Pietro (1971) の包蔵する欠落と疑問点

(a) CLの一拠点をなし、そこで開催された第19回言語学専門家会議の主要テーマもCLであったGeorgetown大学のDi Pietro教授(1932-)は、十余年にわたるCSの成果を近著 Language Structures in Contrast, 1971に集成した。「斬新・包括的」であると同時に、控え目ながら野心的なこの労作は、理論と実践の両面を兼備するが、主として理論面に傾注して書かれている。そのような博識・包括性と理論的性格にも拘らず、この野心作には、「重要」と明記された冒頭三章のうち、最初の第一章「CAの発展」論の中に、早くも重大な欠落が認められる。重大という理由は、それらの欠落書の論旨が、以下に指摘されるごとく、CLの理論的基礎づけと確立の問題に緊密に係わっているからであり、従って又当然、それらの論点が、具体的なCSの在り方と水準、および展開の方向を、深く左右するものだからである。現に、それらの論旨の或るものは、CSがになう喫緊の課題の解決に、不可欠な関連と効力をもつ。(後述参看。)

具体的にいえば、Di Pietro教授は、CSの系譜を辿るに当って、1892年の著作から説き起こし、次のものを注目すべき労作としてあげ論評を加えている。――

Ch. Grandgent『独・英語音』1892; W. Viëtor『英・独・仏音声論要綱』1894, 3版; P. Passy『主要欧州語小比較音声論』1906; V. Mathesius『英・チェコ対比論』1926;

Y. Chao「英(米)・中国抑揚研究序説」1933; B. Whorf「言語と論理」1941; Reed, Lado & Shen「外国語学習時の母国語の重要性」1948; Fries & Pike「共存する音韻体系」1949; U. Weinreich『言語(間)の接触』1953; Z. Harris「転移文法」1954; R. Lado『文化間の言語学』1957;

R. Stockwell『英・タガログのCA』195?, 未刊; P. Schachter『英・パンガシナンのCA』1959;

W. Dingwall「変換文法とCA」1964；シカゴ大学版3セッターW. Moulton『英・独の話し言葉』1962；  
H. Kufner『英・独の文法構造』1962；Stockwell & Bowen『英・西の話し言葉』1965；Stockwell,  
Bowen & Martin『英・西の文法構造』1965；Agard & Di Pietro『英・伊の話し言葉』1965；Agard &  
Di Pietro『英・伊の文法構造』1965。なお著者には、「CAと深層・表層文法概念」1968；「CAと  
言語の創造性」1971などの論考がある。

が、意外なことに、CLの発展史をつづる上記の「注目すべき労作群」の中に、CLの成立を夙く  
から切望し、その原理を克明に、また広大な学際的視野に立って提示したO. Jespersen (1924)  
とK. Bühler (1934)の大著（詳細後述）を、Di Pietro教授は逸している。のみならず、それら  
は、参考文献集にも収録されていない。逆に、Jespersen, Bühlerの大著より可成り遅れて出たB.  
Whorfの小論考「言語と論理」1941（一前掲）が、そのCL指向の「予言性」を誼われ、堂々と引  
用文まで掲げられている。これらのことを考え合わせるならば、上記の欠落は、ますます本末顛倒  
も甚だしく、到底首肯し難いものとなってくるはずである。〔因みに、Jespersen (1924)は、  
その原型がColumbia大学で講義されたものであり、またその主著1934が戦後1965年にも復刊  
されたBühlerは、自らCaliforniaに移り住み、そこで晩年を過した。従って二人とも、欧州  
人ながらアメリカと決して無関係ではなかったのである。にも拘らず、欧州の血を色濃く引くDi  
Pietro教授が、他の多くのアメリカ生れの学究と同趣の視野の不足を露示していることは、遺憾  
であると同時に理解に苦しむ。ましてや、そうした視野の狭さが、様々な懸案問題の解決に、大き  
な障害となっている現事態に想い至るならば、その欠落は一層惜しまれる。〕

以上の欠落論に対しては、次のようなDi Pietro弁護論が提出されるかもしれない。Jespe-  
senとBühlerの問題のGreat Booksは、二・三ヶ国語を対象とする特殊な（所謂）CSとは  
別種のものであり、寧ろ一般CL（"General CL"—かつてのTragerなどの用語参照）又は  
CL原論の書として、一般言語学ないし理論言語学の分野に属するというのが、それである。が、  
そうした見地からいうならば、企画および内容的にいつてDi Pietro (1971)自体が、その表題か  
らも推測されるごとく、決して特殊なCSの書ではないのであって、これ又同様に選外の書とされ  
なくてはならない羽目になる。そうではなく、特殊なCSは、当然、一般CL又はCL原論をふま  
え、両者は緊密・不離の深い関連に立つ。そしてその際枢要なことは、『両者の関係は、「後者の  
一般論が前者の多くの特殊論から公約数的な共通・一般者として抽出される」という抽出主義の原  
理 Abstractionist Doctrine に支配されるのではなく、「後者が前者を基礎づけ、定義・生成す  
る」という根拠づけと生成の原理に支えられていなければならない』ということである。従って後  
者は、抽出主義の誤解を封ずる意味からいつて、一般CLではなく、CL原論又はCL理論/理論  
CLとよばれるのが至当であろう。〔そしてCL原論がL原論に連なり重複面をもつことは、意味  
原論が mutatis mutandis にそうなのと同様、当然である。〕

(b) Di Pietro (1971)には、重要と明記される冒頭三章の、第一章に看過できぬ欠落が認められる

のみならず、第二章「理論と手順」にも大きな疑問点が伏在する。「生成的」と「分類的」に関して著者は次のごとくいう。――

In general linguistic theory, the concept "taxonomic" is often opposed to "generative." No such opposition is intended in this book. The taxonomy which gives form to our CA is based on the generative rules of the languages that are being contrasted. — P.19 (2.3分類と操作).

つまり、生成と分類の両概念を氷炭さながらに相容れないとする多くの生成文法家たちに対して、著者は、両概念は対立するものではないと主張し、Tagmemics 派に属する Longacre の分類弁論を、以上に続けて次のように援用する。――

Longacre (1968) explains the value & use of a taxonomy in linguistics as follows: To what degree is linguistics a taxonomic science? This is surely a question to which this generation of linguists should give considerable attention. But this question cannot even be entertained by those who have decided that taxonomy has no place in linguistics. Nevertheless, it seems obvious that the various units & relations of a language can be laid out, classified, and labelled in a manner not unlike the cataloguing of flora & fauna with labelled identification of their functioning parts. — P.19

構造論者であった著者の前歴に通ずる、この構造文法寄りの分類学的論議の援用は、GTG (生成変換文法) の深化・前進を試みた Fillmore に則り更に一步進もうとする著者の現姿勢とは融合せず、その主張をモザイク理論化しているのではないか。(同様なモザイク理論は、他の GTG 論者にも案外多いと思われる。Ross の範疇批判参照) が、一方で氷炭同様の対立概念とされる生成と分類が、果たして著者がいうような単純・安易な妥協を許すであろうか。もし許すとしたなら、それが木に竹同然のモザイク理論でない保証は、どこにあるのか。これらの疑問点の確認と解決は、極めて重要であり、回避できないはずである。それゆえ、上記の疑問点とそれを巡る問題は、理論に傾注する著者の、理論面における、特に方法論における反省の深さと周到度を測定する試金石を提供している、と同時にそれは、CL が真正な科学性を獲得・体現するためには、是非ともその理論的解決と実践的解答が与えられなければならない課題を、われわれに突きつけているといえる。〔にも拘らず、Spolsky の Di Pietro (1971) 論評 (Lang., 49, 3, 1973) は、第一の欠落点にも、又上記の疑問点にも、むろんその解決にも、全く言及していない。のみならず、次の第三点にも何らふれる所がない。――CL に対して、実践的な "second-language pedagogy" を求めることに急であっても。〕

(c) 疑問点は、以上に止まらない。重要と明記される冒頭三章の終章 ― 第三章「言語の構造図式の多面的諸相」は、CL が則るべき言語研究のモデルを取り上げ、構造言語学や GTG の方式を論じ

た後に、「そのどれよりも包括的な図式を提示」し、それは「勢い次のごとく多面的となる」という (pp. 35 - 37)。—

(1)それは意味論・統語論・音韻論の三部門をもち、(2)また深層に始まり一連の中間規則をへて表層に至る構造段階をもつ。(3)それは生成的であり、所与の発話資料に限らず全ての可能な文を予測できる規則から成る。

が問題は、(4)著者が示す  $S \rightarrow \begin{matrix} M \text{ (odality)} \\ P \text{ (roposition)} \end{matrix}$  に始まる規則によって、全ての文が生成可能か否かである。 $S \rightarrow NP + VP$ ,  $S \rightarrow (\{ \overset{Q}{\text{Imp}} \}) (\text{Neg}) \wedge NP \wedge \text{Aux} \wedge VP$ ,  $S \rightarrow \text{Pre } S(\text{entence}) NP \quad VP$  などと同様に、この方式も又、「命題的内容+命題的態度」という言語の一局面に制限され、Oh, wow! ; Hi, bud! ; &c. の諸文を生成することはできない。また(5)※ How rambunctious they aren't! ; ※ What a slicker he wasn't! のように、感嘆文にはなぜ否定が不可能なのかも、命題文に附会的な  $M \rightarrow [\text{time, aspect, } Q, \text{negation, \&c.}]$  の方式では、解くすべがない。更に(6) Hear me out! ; Spruce yourself up for dinner! などの命令文に、なぜ過去時制が不可能かも、命題文に附会的な上に lumber room さながらの法範  $M \rightarrow [\text{time, aspect, } Q, \text{negation, \&c.}]$  では、Aux や Pre S と同様、解明できない。(Constraints の設定は、なぜの解明とはならず、むしろその回避に導く。)更にいえば、上記のような一局面的な言語観に立つかぎり、Aux や Pre S を、そして今又 M を、どのように改変しようと、五十歩・百歩の finicking に終わるほかはないのである。なぜなら、それらの根本的で正当な改訂は、全ての原理的言語研究の基本をなす(—にも拘らず著者や諸他の GTG 論者が欠く)言語の全貌と本質(的機能)への深い反省を必須としているからである。そうした反省は、上記の lumber room M を解体し、(i) Ausdruck 「表出」、(ii) Appell 「訴え」、(iii) Propositional Attitudes (例、断定)、(iv) 純動詞補助部 (例、aspects) を識別し、しかもそれらを、言語の場に即して夫々別個の次元に截然と位置づけることになろう。(後述参看。) Di Pietro (1971) が諸他の GTG と同様に欠く言語本質論を、明白に CL の出発点としたのは、皮肉にも Di Pietro 教授が看過した Jespersen (1924) と(わけても) Bühler (1934) であった。が二人は、その本質論議を巡って、以下に明らかなごとく一部を共有しながらも、力点と思考様式の点で異なっていた。

## II O. J. の “Notional Comparative Grammar”

O. Jespersen (1860-1943) の The Philosophy of Grammar (1924) は、周知知られ屢々論じられてきた。が、CL/CG 原論としてのその真諦は、案外、深く掘り下げられなかったようである。64 才の円熟期に完成・上梓された、この集大成の書は、次の言葉 (1, 2) で始まり、結ばれている。—

- (1) The essence of language is human activity... The speaker and the hearer, and their relations to one another, should never be lost sight of if we want to understand the nature of language and of ... grammar. ...

My chief object in writing this chapter has been to make the reader realize that language is... a set of... habitual actions, and that each word and... sentence spoken is a complex action... of the speaker [in some] situation,... Grammar thus becomes a part of linguistic psychology or psychological linguistics. — Ch.I Living Grammar.

- (2) We can obtain new and fruitful points of view, and... arrive at a new kind of Comparative Syntax by... starting from notion or inner meaning and examining how... the fundamental ideas common to all mankind are expressed in various languages,... This comparison need not be restricted to languages [of] the same family... but may take into consideration languages of the most diverse type and ancestry. The specimens of this treatment... given here may serve as a preliminary sketch of a notional comparative grammar, which [I hope] others... may take up and develop further, ... to assist us in gaining a deeper insight into the... nature of language and of human thought than has been possible in this volume. — Ch.XXV Conclusions.

(下線筆者, [ ] 筆者圧縮)

引用(1)の「言語の本質は人間の活動である」という motif が Humboldt に通じ、又 Bühler の言語心理学的なそれにも似ることは、一目瞭然である。その本質の普遍性を意味のおびる一般性に結びつけ、Ph. of Gr. は、引用(2)が示すごとく、在来の(音韻つまり形式を軸とし、同系語間に限られた)歴史的・比較文法に対して、"notion or inner meaning / fundamental ideas common to all mankind" を踏まえた、従って全言語間に適用可能な、"notional comparative grammar" 「一般概念または内層的意味による比較文法」— 即ち著者の独創的な CG を提唱した。そしてそれを克明・包括的に説いたこの大著は、原論的であると同時に、豊富な実践的データを含んでいるが、下の引用(3)が示すごとく著者の努力は、わけても「全個別語文法の背後に在る大原則を正当に強調すること」にあった。—

- (3) My endeavour has been, without neglecting investigation into the details of the languages known to me, to give due prominence to the great principles underlying the grammars of all languages. — P. 344 (下線筆者)

つまり、そうした文法の大原則 — 文法の原理という普遍的基盤の支えがなければ、どんな言語間の CG/CL の実践も、客観的な拠り所を失って、finicking with trifles に転落するほかはないからである。

(4) が第一に問題なのは、実践的 CS が依拠する普遍的基盤である CG 原論のカナメをなす "notion or inner meaning" とは、精確にいつて何か、ということである。"Notional Categories" の説明の中で、著者は次のごとくいう。—

『現実の各言語の構造に依存する統語論範疇と並び、或はそれを超え、或はその背後に、現実の諸言語の偶然的事実から独立した幾つかの「言語外範疇」があり、それらは、全言語に明確に表現されていることは稀にせよ、「全言

語に適用可能な点で普遍的」である。その或る範疇は、「文法の性 gender に対する」自然の性 sex のような「外界の事実」に関連し、他の範疇は、「心意的状態」とか「論理」に関連するのであるが、それらの「言語外範疇」に適切な総称がないので、一般概念 *notion* とか一般概念的 *notional* という術語を用いたい。そのような範疇と統語論範疇との関係を吟味することが、文法家の課題である。』—P. 55 ([ ] 内の部分と「」印は筆者)。

が、もし著者が、その愛用した「言語内の文法的性 gender (mas., fem., neut.) に対する言語外の自然の性 sex (male, female, sexless) の独立・外在論」—

GRAMMAR	NATURE
Gender	Sex
(syntactic)	(notional)

と同じ筆法で、全ての notions とその範疇を、言語とは独立に（或は言語以前に）存立しうるかのごとく考えたとすれば、その発想は単純素朴にすぎる。なぜなら言語は、婦人も馬も同じ中性扱いの *das Weib, das Pferd* とするような化石的で過然的と思われ易い面や、又思惟以外の、現実的な目的に奉仕する側面をもちながら、同時に思惟にとって不可欠な論理的側面を含み、従って概念一般とその範疇は、言語と無関係には — 言語に支えられずには存立し難いからである。そこでは、言語と論理は重複し、屢々一致する。（でなければ、言語の効用は半減しよう。）現に著者晩年の Analytic Syntax, 1937 の中に、言語外から言語内へと範疇変更をされた事例があるのも、原理的にいって以上の経緯に起因する。そこで、次の点が問題となる。

(b) 問題点の第二は、では *notional* な範疇は、どのような手順で設定されるのか、ということである。著者は図式を掲げ、次のごとく解説する。—

A. FORM	B. FUNCTION	C. NOTION
(the world of sounds)	(syntactic category)	(the world of ideas)
<i>-ed (handed)</i> <i>-t (fixed)</i> <i>-d (showed)</i> <i>kernel unchanged (put)</i> <i>different kernel (was)</i> <i>etc.</i>	<i>preterit</i>	<i>past time</i> <i>unreality in present time (I wish we knew; if we knew)</i> <i>future time (it is time you went to bed)</i> <i>〔shifted present time (how did you know I was a Dane?)〕</i> <i>all time (men were deceivers ever)</i>

注。二行目( )( )の部分は、pp. 56-7 からの筆者の補充。C欄のうち[ ]は、その部分が Analytic Syntax, p. 107 で言語外から言語内へと範疇変更をされ訂正されたので、筆者がつけたもの。A欄は一例畧。

『CのNotionにどんな範疇を認めるかに当っては、それが言語学的意義をもつように常に留意することが重要である。われわれの目的は、言語（/文法）現象の理解なのだから、言語の存在や表現を無視して、ただ事物や観念を分類し、それらをCの範疇としてはならない。それどころか、先にAの形式に表現されたものに細心の注意を払って

Bの統語論範疇〔例、Tense やその下位範疇の preterit〕を立てたのに準じて、今度はBの統語論範疇に細心の注意を払ってCのNotionの範疇を確立しなければならない。本書の課題の大半は、文法に表現されている限りにおいて、Cの主要範疇を体系的に検討し、文法とCとの両範疇の相互関係を、様々な言語にわたって吟味することにある。が、屢々文法範疇は、高々Cの範疇の徴候程度の表現でしかなかったり、文法現象の背後にあるC自身も、時にカントの「物自体」のように把え難いこともある。従って大局的にいって、われわれは、昔の哲学的文法家流の「普遍文法」への到達は期待してはならない。われわれが達成できるのは、現代の言語学が許す限りの、普遍文法への最も近い接近である。』—P. 57（〔 〕の部分は筆者の補説）。

以上の解説が示すように、著者の notional な範疇は、一面では事物の合理的な分類と観念の論理的な分類に則りながら、他面では現実の言語の統語論範疇を尊重し、それを踏まえて設定されている。それゆえ、そのような notional な範疇は、実は、現実の言語の統語論範疇より一段と「高位で一般的」な、一つの新たな統語論範疇をなしている、といえるはずである。別言すれば、それは、著者の「文法の哲学」の枠組の中で、現実の言語の文法が、それに近づくことによって、より高度の合理性と一般性を獲得し完全性に向う、理念的な統語論範疇の役割を果たしているのである。このように notional な範疇は、現実の文法範疇にとって、その目標 — 理想であるがゆえに、著者の眼には現実の言語の文法は、「屢々 notional な範疇の徴候程度の〔つまり、不完全な〕表現しかして」来なかったものとして映り、又どんなに「進歩した」言語の文法にとっても Notion は、曠野の逃げ水にも似て、到達したかに見えて、なお遠く去りゆくものとして映じ、著者自身にさえ、それは「時にカントの物自体のように把え難いこともあった」のである。又一方その微妙さは、〔上述の経緯と合わせて〕皮肉にも、理想である Notion の或る範疇と現実の言語の或る文法範疇との混線と所遇変更を生む機縁ともなったのである。元来理想的なものは、原則的には、現実から隔離した一者であるべきなのであるが、実際には、屢々複数の形をとる。（理想の実現 — 現実化は、新たな理想を求めて止まないからである。）特に著者の notional な範疇のように、意図的に現実の言語の文法範疇に引き寄せて設定された場合、そうならざるをえない。それは、ab initio に、最多者である現実に近い多者たるべく運命づけられた側面をもち、現実の文法範疇と必然的に混淆する契機を孕む。結局それは、現実からの隔離・隔絶と現実への近接・混淆という ambivalence の上に立つ。

現実の諸言語とその文法を前にして、それらのCSに必須な文法の原理の拠点概念として設定した Notion とその範疇に、Jespersen は、上述のごとく理想を託し、それを二重写しにしていた。その背景には、S. Heegaard の哲学講義に深く打たれ、若年初期の Progress in Language, 1894 から念願の人工語 Novial の完成をへて晩年の Efficiency in Linguistic Change, 1941 へと、著者の全労作を貫くに至った、「Spencer 的進化論」の思考様式と言語発達論があったことは、云うまでもない。著者生涯の労作「近代英語文法」の第一巻序言の "…not always consistent or perfect, but progressive and perfectible — in one word, human." — P. V. は、それを端的に象徴する。価値を科学することは必要であるが、科学自体に理想という価値概念を導入することの是非については、読者の判断

にまかすでしょう。が万一、言語の理想像を考えると、言語の本質(的機能)論が、その前提となるべきである。それは、理想像の設定のみならず、全ての科学的な言語研究 — 就中(歴史的比較の限界を超克した)新言語学の重要な開拓分野を占める CS にとって、正にその先決要件 — 少なくとも同時的並行要件をなす。Ph. of Gr. は、確かに言語の本質論で始まっている。が、その明細化を阻み、それを単なる Humboldt 的 "Energetik der Sprache" / language as activity の再強調という隔靴搔痒の域に留め置きながら、固定表現(活動)と自由表現(活動)論(第一章参照)から遂にはその目標としての言語の理想像の導入に導いた、今一つの主要な背後要因は、著者自らが信奉して疑わなかった古典的な科学の方法論にあった。そこで、われわれは次の第三の問題点に導かれる。

(c) Ph. of Gr. で惜しまれる第三の問題点は、科学の方法論への反省の欠如である。(d)に引用された範疇解説からも察知されるごとく、著者の基本的な方法論は、帰納法と分類作業にあり、それに基づく類概念の確立に、著者ははは終始している。〔むろん、かれが得意とした位階(ranks)論の中には、I firmly<sup>3</sup> believe<sup>2</sup> → my firm<sup>2</sup> belief<sup>1</sup> (p. 101)などの転位が示すように、GTG と同趣の一種の操作主義も窺われるが。〕そしてその類概念は、それが抽出される個々の事例の本質と見なされる。がそのような類概念は、明らかに本質とは程遠いものである。なぜなら、Ph. of Gr. にいう「全人類に共通な根底的観念つまり notions」の範疇も、著者の科学観に立つかぎり、多様な存在や観念〔(d)(f)参照〕から抽出される最大公約数的な類概念にすぎないのであって、やはり次元の深さに欠け、現象的・表層的次元のデータの多寡や変動に左右され、それらに準じて浮動し変転し、しかも屢々幾重もの抽象と捨象をへた内容の稀薄で空疎なものでしかないからである。そのように本質とかけ離れた類概念が、現象の説明原理となりうるはずがない。類概念は又、中間的ケースを適切に処理できない。(その点については、■を参看)そうした科学の方法論上の欠陥と限界からくる不安定な動揺性と空疎なはずの内容論が、Jespersen の場合、その進化論的な理想主義によって、一応蔽い隠され救われているかに見えるのは、興味をひく。つまり、かれの Notional Categories は、多様なデータからの共通性抽出による類概念の局面と、同時に現実の統語論範疇の理想像という別の一面を備えていた。そして、その別の一側面たる理想像がおびる「原則的一者としての不動性と内容の豊かさ・完璧さ」を、Notional Categories に投影することによって、著者は、抽出主義 Abstractionism に基づく類概念が内蔵する宿命的な欠陥と限界に対して、かれが無意識のうちに感じていたであろう不満を、恰も自ら克服しようとしているかのようである。しかし今日の科学は、むろん、そのような仕方でも古典的な科学の方法論を克服しているのではない。そしてその克服は、生成理論による単なる対決を越え、又 M. Black の帰納弁護論や就中 I (d) 所述の Pietro 流のモザイク理論を処理でき、Ross の範疇批判、中間的事例の正当な処理法をも体系化できるものでなければならない。(それは、次の■以下で提示される)

〔未完(次号に継続)〕